

# 雲隠れ

ねらりひよんの孫ファン小説

鶴×リクオ×鶴

十五歳以上対象

涼しい夜風が吹いた。霞んだ雲が薄霧のように流れ、月の表面に掛かる。真珠のような白い輝きを放つ円い月が、雲に隠れた。すると広い庭は黒い大きな影で覆われ、闇に包まれる。

その暗闇の中で人影が、ゆらりと揺れた。石榴の様な深紅の瞳が妖しく光り、風に長い髪が靡く。そんな訪問者を蒼い鬼火が離れへと導くように出迎えた。

そして、雲が切れる。再び白い望月が現れた。銀と黒の長い髪。容顔妖しく麗しく、熾火のごとき瞳は際立ち、澄んだ月明かりが、葉鳩堂の前栽を歩く長身の妖を照らし出す。

男は迷うことなく、葉鳩堂の離れへと急ぎ足で歩んでいた。だが、足音はない。まさしく無音の来訪だった。ぬらりひよんの血を受け継ぐ、この男にだけ許された技。

妖の男は離れの前に辿り着くと、玄関に当たる戸を開けることはなく、裏の縁側へ回る。そして草履を乱暴に脱ぎ捨て板縁へ上がり込み、いきなり障子戸を開けた。其の低、音もなく部屋に入る。障子を後ろ手で閉めると白鞘の脇差を懐から取

り出して右手に持ち、刀掛けにそっと置く。

更に奥の間へと続く襖へ向かって、大股で音もなく闊歩する。そして襖の引手に手を掛けると静かに引いた。

「―鳩。」

低く良く通る声が奥の間に響く。

部屋の中には褥が敷かれており、一人の妖が夜具の中に横たわっていた。男の呼びかけに、その妖が目覚めます。

「：リクオ？」

三代目の訪れを悟った鳥妖は、ゆっくりと褥にその身を起こした。

そして臥所から名を呼び返された長髪の美丈夫の妖は、暗闇の中を悠然と褥の中の鳥妖へと歩み寄った。鳥妖を見つめる深紅の瞳が艶めいた色を帯びる。前触れのない三代目の突然の来訪に、褥の鳥妖は一瞬、虚を突かれたかのように透明な

萌黄色の瞳を瞬き、三代目を見つめ返したのだ  
た。

「：よう、鳩。久しぶりだな。」

その聞きなれた声に、褥から瘦せて節くれだった  
手が差し出される。

「：ああ。久しぶりな、リクオ。」

長身の妖が、その武骨な手を取った。

鳥妖の白綾の寝間着の襟合わせの緩みから、夜  
目にも鮮やかな刺青紋様が浮かび上がっている  
のを認めると、リクオは、その形良い目を細めた。  
ふるいつきたくなるような色男とは、まさに鳩の  
ような男の事を言うのだな。そう思いながら、口  
許に官能的な笑みを浮かべたのだった。

\*\*\*

夜も更け、満月が中天に懸っていた。夜風で雲  
が流れ、横雲の間から月が現れる。

「：さて、そろそろ帰るとしましょうか。」

そう独り言を呟いた蛙番頭は、広げていた葉鳩  
堂の帳簿を閉じた。

ここ三日ほど、葉鳩堂の急患や往診が多くて、  
出納を預かる立場だというのに、ゆっくり帳簿を  
付ける暇さえなかった。肝心の主の組長薬師は、  
金勘定に殊更疎く、まず収支というものを分つて  
いない。気が付けば、始末や算用は自分に丸投げ  
されていた。頭領の癖にシノギを回収し忘れても、  
それすら覚えていないという体たらくだ。その癖、  
医方書、本草書集めには金に糸目をつけないとい  
う莫迦さ加減も持ち合わせていると来ている。全  
く。

しかし、少しばかり気になることもあった。一  
日の診療が終わり、放心したように診察の間に一  
人座していた主が、何か心に決めたかのように呟  
いたことが、頭にこびりついている。

「：やっぱり薬鳩堂は畳んで、何処かへ引越すしかねえか。」

：畳む？：引越す？：何を莫迦な。奴良組本家の御膝元で開業しているからこそ、信頼され、頼りにされての医院繁盛だというのに、忙しいから引越したいとでもいうのか。恩知らずの頭領薬師の言動には呆れてものも言えない。しかし冗談を言うことがない主の事、気になる戯言ではあったが、それ以上、追求する気にもなれず、薬鳩堂番頭として、素知らぬ振りでやり過ぎたのだった。

蛙番頭は、気を取り直し、薬鳩堂の帳場を片付けて金子を納めておく帳場箆笥の鍵を掛け、手元の小さな灯りを消す。そして席を立ち勝手口にかけてある既に火の灯された手丸提灯の手に取ろうと、水掻きの付いたその小さな手を伸ばした時だった。ことり、と何処からか音が聞こえた。

用心深い番頭は耳を敏てる。  
更に、がたがたという何かを探す音、板間へ上がる足音、湯釜の蓋を開ける音、柄杓で湯を汲む

水音がする。

：離れに帰ったはずの主だろうか。それにしても、がたがたと探し物をしている物音が多い。見つからなくて、手当たり次第ひっくり返して始めている心配がする。

台所を住処とする付喪神たちの仕業かもしれない。主が就寝した後は、静かにするよう、言って聞かせなくてはいけない。

番頭は、疲れ切った溜息を付くと、手丸提灯を持ったまま、薬鳩堂北側の台所へと急いだ。

療治の間を通り過ぎ、更に続きの控えの間を通り過ぎると、広い板間とそれに面した土間の台所がある。暗い台所の板敷きの上を小さな付喪神が二人で平たい湯桶らしきものを抱えて、土間に下りて走っていくのが見えた。：目を離すとこれだ。また台所の物を持ち出して。番頭は、その板間の上り框になっているところに立つと、竈のある土間に向かって提灯を掲げた。

「これ、付喪神たち、今夜は静かになさい。頭領

の鳩様は、お疲れで休んでおられるのですよ。」

だが、竈のあるあたりから衣擦れの音がして、番頭が暗い土間へ目を凝らす。格子窓から蒼白い月明かりが差し込み、浮かび上がった人影に、番頭が腰を抜かした。

紅く妖しい光を湛える瞳に長い髪。長身瘦躯の男。発する気配すら尋常の妖ではない……。この妖は、明らかに：。

「：さっ、三代目！」

驚いて尻餅を付きそうになりながら声を上げた番頭に反応するかのようには、人影がゆらりと動いた。

「：ここの番頭か。悪りいな、脅かしちまって。」

柄杓を手に持ち、男は足元に走り寄ってきた竹壺たちが差し出す湯桶を背を屈めて受け取っている。

そして手にした柄杓で、釜から温湯を掬い取っては湯桶へと移し始めた。医院でもある薬鳩堂では、夜間も必ず白湯にするための湯が用意されている。

「実は鳩に会いに離れの方へ来ていたんだけどよ。：もしかして鳩の野郎、体調悪かったのか？」番頭へちらりと横目で視線を送って、少し目を伏せがちしたリクオが問う。

「え、ええ：ここ三日程、患者が多くて：大層お疲れのほうです。」

「：そうか、やっぱりな。いきなり血を吐いちまってよ。取り敢えず湯を貰っていく。あと、敷布や寝間着の替えは何処だ。」

「それなら、鳩様が既に離れに持って行かれました。恐らく部屋にあるのではないかと：。」

「わかった。：番頭、おめえは、もう遅いから帰ってくれ。」

「い、いえ、今夜は泊まり番がおりませんので、私は残った方が：。」

リクオが首を振った。

「おめえも疲れているはずだぜ。鳩の面倒くらい、

オレがみるから気にすんな。」

「しかし：血を吐かれたのでしたら、私も。」

「鳩に離れには入るな、って言われているんだろ。」

番頭の方へ振り返りながら、そう言った。

「確かにそうですが：。」

「おめえの家は近くか。」

「はい、葉鳩堂の敷地の隣の長屋です。」

「じゃあ、何かあったら呼ぶから、帰ってもらって大丈夫だ。他の薬師組員は？」

「門弟たちは、私の家の隣の長屋でございます。」  
「わかった、何かあったら此奴らに呼びに行かせ  
るから、心配するな。」

妖の男は足元の付喪神たちを顎でしゃくって指  
し示した。小さな竹壺たちが胸を張って見せる。

\*\*\*\*\*

「鳩、湯を貰ってきたぜ。」

障子を開けてリクオが部屋に入る。咳が収まらず、  
リクオに返事のできない薬師の妖は、ただ頷くし  
かなかつた。

「：それにしても酷え咳だな。：血は止まったの  
か。」

鳥妖怪が咳をしながら、やはり頷く。

「取り敢えず、薬を飲めよ。ここにある薬でいい  
のか。」

枕元の盆の上には、既に煎じ薬の入った湯呑み  
が置かれている。リクオは、それを手に取り鳩の  
前に差し出した。

鳩が震える手で、それを受け取り、口許へ運ぶ。  
その背を、リクオが神妙な面持ちで擦ってやった。  
灯りがともされた薄暗闇の部屋の中で鳥妖怪の  
薬湯を啜り飲む音が響く。

「おい、ゆっくり飲めよな。咽るぞ。」

「：ああ。悪いな、リクオ。世話を掛けちまって。」  
薬師妖怪が力無く答えた。その傍らでリクオは湯  
に手拭いを浸すと手早く絞った。

「血で汚れちまったのは、オレが拭いてやるか

ら。」

リクオが身を乗り出すと

「：オレのことは構わなくていい。お前は、三代目で客だ。そんなことはしなくていいんだ。」

と、薬師の妖が、その好意を断った。

だが鳩の文句には答えずに、リクオは男の頸を捉え、濡らした手拭いで鳩の口許を拭き、血の付いてしまった首や胸元を丁寧に清めていく。

「鳩、手を出せ。手も汚れちまっただろ。」

リクオの世話を拒むかのような固く握った拳を開かせて、指の一本一本まで綺麗に血の汚れを拭き取っていく。

「：鳩、悪かったな、無理をさせちまったみたいだよ。」

リクオは、ぎこちない口調で男を氣遣った。

「：何、大丈夫さ。何より、おめえに、あんな切羽詰まった目で迫られたら、拒めねえからな。」

口許が緩やかな弧を描き、鳩は声もなく笑った。

「：鳩、本当に悪かった。おめえが具合が悪いとは気が付かなくて。さっき番頭が言ってたんだが、

ここ三日ほど、随分と忙しかったんだってな。知らなくてよ。」

「：たまたま忙しかっただけだ。ここんとこ病人と怪我人が多かったからな。」

痩せた薬師の片頬に、冷めた笑みが現れる。

リクオは、今度は薬師の寝間着の腰紐を解き、脱がせると、持ってきた新しい寝間着を肩に掛けやる。

「鳩、ああいう時は、断ってくれていいんだぜ。」

「：：：：：：：：：：。」

二度目の着替えとなる新しい寝間着の白い袖に腕を通しながら、鳥妖は暫し無言になった。

「：いや、そういう訳にはいかねえな、リクオ。

断って、早速、他所で知らない女抱かれたら、って思うと気が気じゃねえからな。」

視線を反らすと、鳥妖が独り言のように呟いた。リクオが手を伸ばし、鳩の寝間着の襟合わせを整えてやる。

「：何言ってやがる。いい女なら、女を作ってもいいって、以前、言っていたじゃねえか。」

リクオのからかう様な言いざまに、鳩が苦々しい微笑を浮かべた。

「：ああ、言ったさ。いい女ならな。器量よしで質も良くてよ、出来れば、鳩一族の女どもにてえに賢ければ、なお上等だな。」

「：：：：：：：：：：。」

褥の枕元の行灯の光が儂く揺れ、暗闇の中で、二人の影も頼りなげに揺らいだ。無音の時間が訪れる。

その静寂を破ったのは薬師だった。

「：なあ、リクオ。もしよかったら、鳩一族の若い娘でも紹介してやろうか。」

「：：：：：：。」

「：一族の身内に、いい娘がいる。」

「：おいおい、まさか本気で言っているんじゃないぞだろうな。」

鳩の着替えを手伝っていたリクオが、手を止め、鳩の真意をはかりかねるかのように視線を上げた。肝心の鳩は天井を仰いでおり表情は窺えない。

「：その娘、死んだおふくろの実家の血筋だ。優しい性根だし、綺麗で賢いって評判だ。：そういや、以前から縁談を紹介してくれて頼まれていたな。」

鳩の袖を整えていたリクオの手を、薬師の妖が捉えるかのように、ぎゅっと握りしめる。

「当然、オレと髪の色や瞳の色は同じだし、オレはお袋の実家似だから、その娘はオレと目元とかそっくりだぜ。まだまだ若くて、毒は回ってねえし。」

「：：：：：：：：：：。」

—鳩は、一体、何が言いたいのだろうか。

リクオは鳩の意図をはかりかねていた。

「：あのな、リクオ。いざれ、お前は皆に奴良組の四代目を望まれる。」

鳥妖のリクオの手を握る力が一層強くなった。だがリクオは、鳩の手を振りほどく。

「：奴良組を継ぐのは、別にオレの子じゃなくてもいいと思ってる。血が繋がっていなくても、



総大将に相応しい奴はいるさ。」

そう言いながら、今度はリクオが改めて鳩の手を握り返した。再び沈黙が訪れる。

「リクオ、お前は若過ぎて、そう思うのさ。ぬらりひよんの血ほど、魑魅魍魎の百鬼夜行を率いるのに向いている血筋はねえよ。」  
今度はリクオの手を再び握り返すことなく、鳩は首を振った。

「……………」

闇の中で、揺らめく灯りは弱く、儂い。

「：なあ、リクオ、このごろ考えるんだ。せめてオレが女だったらよかったのにな、ってよ。或いは、お前が女ならな、って。」

自嘲的な笑いを浮かべながら、鳩は嘘とも本気とも取れぬ言葉を言い連ねる。

小さな炎の芯の焦げる音だけの闇の中で、鳩が視線を上げて奴良組三代目のリクオを見上げた。リクオの表情は、明らかに困惑の色を帯びている。百鬼を束ねながらも、若く心の純粹な義兄弟のリクオ。

己は元服した途端、みっともなくも言い寄る祿でもない女たちを片っ端から抱き、自墮落で情けない日々を送っていたものだった。だがリクオは、只管、己だけを求めてくる。

初めて知った大人の色恋に、若く経験のない身体が夢中になっているに違いなかった。

そのリクオは無言のまま、己の寝間着を整えてくれていた。その掌の温もりを肌に感じながら、男は静かに目を閉じる。

\*\*\*

眼裏には、濃緑の茂みと空を覆わんばかりに梢を広げた木立がどこまでも続く景色が見えている。そして視線の先には木深い森がぼっかりと呑み込むように鳩を待ち構えていた。暗い緑陰が覆う細い山路が奥へ奥へと鳩を誘う。蔓延る草を分け入って行けば、やがて路は途絶え、深く濃い緑の藪が茂り、人も妖も拒む淵へと続いていく。

そして、ひっそりと現れ出た深い淵の姿に、己は息を呑んだ。一点の濁りのない澄み切った水を湛えた淵。

透明な水面。底の見えぬ深さ。何かに取り憑かれたかの如く、ゆっくりと歩み寄っていく。足元は生い茂る下草と小藪から、いつの間にか湿った砂地へと変わっていた。霧で陽も差さぬ暗い水面に、静かに足を踏み入れる。寒々とした小さな水音が響いた。

：深淵へ、ゆっくりと落ちていく。萌黄色の羽根は芯まで濡れ、手足は重く、冷たき水に体の熱を全て奪われ、背に隠し持つ大きく美しい翼は堅く閉じられ、二度と広げられることはない。

そして、心臓は止まる。：儂い息も。底へ、光も届かぬ底へと：静かに沈んでいく。何処までも深く。

その時、リクオの声を聞くかもしれないと思う。

：だが、これは罰なのだ：―恐らく万死に値する―。抜き差しならぬ道を外れた恋路を選んだ己に

課された罰なのだ。そして、己はその報いを受けるに相応しい身なのだから。

：けれど、罪なきリクオを連れて行くことは出来ない。

番った筈の半身を見失い、リクオは己を探すだろうか。

確かに己はリクオが三代目になることを望み、そのリクオを支えていくことを、リクオがまだ幼い頃から決心していた。若頭となった時から、義兄弟として精神的支柱となり見守ってきたつもりだった。

―なのに、どうしてこのようなことになってしまったのだろうか。

今や心だけではなく、身体ごと、己はリクオに必要とされている。そのことは、深い喜びとなっている。だが：

互いに求め合い分かち合い、幾度、肌を重ねても、どんなに分かり合えても、結局、自分たちの辿り着く先は、見えてこないような気がした。

二人で共に行き着くところまで行き、其処には一体、何があるのだろうか。明るい陽の差し込む豊かな野が待っているとも思えなかった。

：もしかしたら、自分たちが行き着く先は底に深い水を湛えた先のない断崖絶壁なのかもしれない。

：ならば、リクオを連れていくことは許されない。

誰も一言も発することのない静寂の中で、部屋に差し込んでくる清らかな月明かりが二人を照らし出していた。

\*\*\*\*

白々と夜が明け始めていた。障子を通して弱い光が入ってきている。薄ぼんやりと部屋の中が明るくなっていくのがわかった。

リクオは自分の掌で自身の肩に触れ、髪に触れ、次第に体の変化が始まるのを確認してみる。寝間着の襟合わせが緩くなり、小柄になる身体に浴う様に、襟を搔き寄せて腰紐を結び直した。妖力も失われていくのがわかる。少年は寢床の中から、隣の蒲団で眠っている鳥妖の男を眺めた。呼吸は、漸く落ち着いてきており、真夜中の咳は、取り敢えず収まったらしかった。一晩中、心配したが、容態は小康を得たようだ。その様子に少年は胸を撫でおろす。

「：鳩くん。」

思わず出てしまった声に、ぐっすり眠っている男の臉が、僅かに動いたのがわかる。：知らず知らずのうち、つい声を出してしまったらしい。：病人を起こさない様に気をつけなきゃ。少年は蒲団の中から、朝が訪れて一回り小さくなってしまった両手を出し、天井に向けて睨してみる。：

特に変化は感じられなかった。この人間の身体に特別な能力があるとは信じ難かったが、本家の鴉天狗や牛鬼、そして薬師でもある鳩にも言われたことを思い出した。

：もしかしたら祖母の癒しの業を受け継いでいるのではないかと。

鳩に至っては、リクオには怪我や病気の療治を施す際に、不思議なほど瞑眩が現れやすく、想定外の効果も多くて驚くと言われた。

その言葉を思い出した少年は、そっと褥に起き上がり、隣でぐっすり眠っている男を再び眺めた。そして、意を決して自分の蒲団から出ると、隣の蒲団の中へ、こっそりと忍び込む。

そして、両手を男の白い寝間着の襟合わせの下へ滑り込ませて胸にびったりと当てた。：男の身体は、とても温かい。その温もりは、リクオに昨夜の狂おしい情交の名残りを思い起こさせた。

「：リクオ？」

鳩を起こさぬよう慎重に掌を当てたつもりだったのに、触れられた感触に男が目を覚ましたらし

かった。

「：ちょ、ちょっと、鳩くん、動かないで。」

「：どうした。寒いのか。」

男は、少年が寒くて自分の蒲団に潜り込んできたのだと勘違いしたらしく、腕を背中へ回すと少年の華奢な体軀を抱き寄せた。身体がびったりと合わさる。

「：ぜっ、鳩くん：。」

「これなら、鳥妖怪のオレの体温で温かい筈だぜ。：な、寒くねえだろ。」

「：そ、そうじゃなくて：。」

男の瘦せた広い胸には、少年の両手と頬が密着する。その上、密着しているのは、其処だけではなかった。男が腕を少年の腰の所まで下ろしてくると、その腰も抱き寄せた。すると下腹部の辺りも温もりを分かち合う。

「：：：：：：：。」

夜には猛々しさを見せていたはずの二人の雄は、今は柔らかく、布越しに感じやすい場所が触

れ合うだけの心地良さが存在していた。

：この男の前では、普通の「リクオ」でいい。恐らく、それは鳩も同じだろうと少年は思った。彼もまた、病弱でありながらも薬師一派を率いる頭領としての重い責を負う立場なのだから。

元来、鳩一族は俊英揃いではあるが、身に持つ毒のため極端に身体が弱く、他の妖怪に狙われたり襲われたりする危険性が高かった。その為、妖怪としては極めて警戒心が強い種族として有名でもある。丸腰で同じ袴に他者を入れるなど、以ての外。同族相手以外では有り得ないはずだ。その一族の頭でもある鳩の臥所に、リクオは難なく迎えられている。それだけでもリクオは、自分を特別な存在と考えてよかった。

しつとりとした温もりの中で、少年が、そっと男を見上げてみると、男もまた、萌黄色の瞳で少年の事を見おろしていた。少年は袴の中で背伸びをする、男の唇に自分の唇を押し当て、その感触を味わう。：勿論、男に拒む気配など、まるで無かった。鳩毒の発作の後で、しかも無防備な袴の中だというのに、見事に何の警戒心も抱いていないらしい。腕の中の少年の好きにさせている。

リクオは、昨夜の情交の余韻を残す男の唇をゆっくりと味わい、漸く自分の唇を離すと、両手を男の胸に当てたまま、自分の頬を男の肩に埋めた。

「：鳩くん、もう少し眠って。：もしかしたら呼吸がもっと楽になるかもしれないから。」

少年に言われるまでもなく、男は既に眠りに落ちていた。野の鳥が番の相手にびったりと寄り添い、安らいで眠るように。

\*\*\*

「：よいしょっと。これで終わりかな。」

明るい朝日の中で、少年は最後の洗濯物である白木綿の敷布を物干し竿へ大きく広げ終わると、満足そうに綺麗に並べて干された数々の洗濯物を見上げた。

足元では竹壺、葉壺たちが、賛美するかのよう

に嬉しそうに手を叩いている。

「：どう？ボクだって洗濯ぐらいできるんだよ。遠野で修行した時、掃除、洗濯は、みっちり仕上がれたからね。」

リクオは両手を腰に置いて、得意げに自慢してみせる。

だが、縁側を偶然通りかかった早番出勤の番頭が、その様子を見て真っ青になって立ち竦んだままになっていた。奴良組三代目総大将に下働きの使用人よろしく早朝から洗濯をさせたと本家に知られては、ただでは済まないだろう。

特に世間知らずの人間の方の三代目は、本家に帰ってから得意になって、葉鳩堂で洗濯をしたことを自慢するかもしれない。その可能性があることを考えると、空恐ろしいことだった。

「：あれ、番頭さん、おはようございます。」

背後の気配に気が付いた少年が、縁側で固まった状態で立っている番頭を見つけ、機嫌よく挨拶をする。

「：番頭さん、どうしたの？：もしかして寒くて動けないの？：番頭さんは蛙妖怪だものね。寒いなら、部屋に入って温まって体を解した方がいいよ。」

にっこりと微笑んで、番頭へ心遣いを示した少年に、番頭はこの光景を見なかったことにしようとして決意した。そそくさと朝の挨拶を終え、その場を去ろうとしたが、ふと気になっていた事柄を思い出し、リクオの方を見た。

「あの：三代目。もしかしたら、鳩さまの義兄弟でもないらっしゃる三代目なら何かお聞きかもしれないので、お尋ねしたいのですが：。」

「：何？ボクの知っていることかな。」

「：ええ、多分。」

「：じゃあ、答えられる範囲で答えるよ。」

「：あの、鳩さまは、この医院を畳んで、引っ越すことを計画していらっしゃるのでしょうか。」

「：：：：：：。」

「：畳んで、何処へ移られるつもりなのでしょうか。」

「：それ、鳩くんが言ったの？」

少年が訝しげな面持ちで問い返した。

「：はい、そのようなことをおっしゃっていただきました。」

「：番頭さん、ボクは何も聞いていないよ。総大将のボクの許可なしに引越さんてしないはず。それに引越されると奴良組としては困るから、許可するつもりもないし。」

「：左様でございますか。：なら、医院が患者さんたちで混んでお疲れになり、主が愚痴っただけでございますよ。」

安堵したような表情を浮かべ、蛙番頭は頭を下げ一礼した。そして仕事に入るべく、表の薬鳩堂の帳場へと足早に去って行った。

「：：：：：：。」

：この薬鳩堂を畳む？何処からそんな話が出たのだろう。鳩からは、その様な話は全く聞いていない。畳みたいほど、疲れているというのなら、本家からも手伝いを出した方がいいかもしれない。少年は心配になった。

リクオは鳩の状況が気になったが、あとで本人に確認するしかなかった。少年は思い直して、明るい朝の陽射しの中で、洗濯物が靡いている様を見上げる。

無事、朝の一仕事終えて満足そうな少年の足元では、空になった盥を片付けるために、薬壺と竹壺がその盥を二人で抱えて、少し離れた井戸の方へ走って行った。

「リクオ。」

気持ち良い朝を味わっていた少年は、背後の声に振り返った。

「お前、今日は随分と早起きだな。」

母屋の縁側に鳩が懐手で立っている。

「鳩くん！」

思わぬ薬師妖の登場に、少年は驚いた声を出した。「鳩くん、まだ起きちゃ駄目だよ！夜中に血を吐いたばかりだっていうのに！」

慌てて走り寄る少年に、男が懐から手を出すと、今度は腕を組んだ。

「：心配いらねえよ。もう大丈夫だ。」

「大丈夫じゃないよ。酷い咳だったし。とても具合が悪そうだったもの。まずは、ゆっくり休んで良く眠って、体調をよくしないと。」

「：いちいち煩せえな、リクオ。オレは薬師だぜ。」  
不機嫌そうな面持ちで、鳩が答える。

「なら、無理しちゃいけないぐらい分っているでしょ。すぐ部屋に戻って横になって。それに羽織は、もっと厚いものを羽織らなきゃ駄目だよ。あと、朝餉は、今、台所の付喪神たちが用意してくれているから、出来たらボクが持っていく。だから気にしないで。あ！そうだ。すぐに薬を煎じて持って行ってあげるから、部屋で待っていて！」  
そう言うなり、台所へ回ろうと駆け出しかけた少年を鳩が呼び止めた。

「リクオ。それより、こんなところで、一体何していたんだ。」

そう問われた少年は、立ち止まると得意げに微笑んだ。

「何って、洗濯だよ。」

「：：：：：。」

「遠野で鍛えられた家事能力を披露していたんだ。」

そう言う少年の足元には、いつの間にか薬壺たちを初めとする様々な付喪神たちが居並んでおり、豆粒の様な小さな手で三代目の洗濯技を拍手喝采してみせる。

「：あのな、リクオ。薬鳩堂では、家事一切を付喪神たちが請け負っている。三代目自ら、下働きをする必要はねえよ。」

少し咎めるかのように言われた少年は、俯いた。  
「：でも：。」

「それにお前は客だ。」

「：でも、我慢できなかったボクの所為で敷布とか汚してしまったようなものだし：。」

申し訳なきように俯いてしまった少年の顔が耳まで赤く染まっているのが見える。

「：それどころか無理させてしまった鳩くんが血を吐いたのも、ボクの所為だよ。」

「：：：：：。」

「だけど、とても会いたかったんだ：そうしたら鳩くんに触れた途端、もう我慢できなくなってしまった：。」

朝になって自責の念に駆られる少年の姿は、どこか痛々しい。



「：リクオ。気にする必要はねえよ。それにオレが血を吐いたのだって、おめえは関係ない。血を吐くのはいつものことだ。」

「：でも：。」

「兎に角、ちっと部屋にあげれ。」

顎をしゃくるように指示された少年は、仕方なく庭下駄を脱いで縁側へ上がった。見れば鳩は、既に部屋に入って奥の場所に陣取って胡坐を組んで座っている。リクオも、その姿を追って部屋の奥へと進んだ。

「その障子を閉めろ。」

そう言われた少年が後ろ手で障子戸を引いて閉めた。

「：鳩くん、やっぱり怒っているの？　：それに付喪神たちの仕事も取っちゃいけないの？」  
その声に部屋の奥に座していた男がリクオを見上げた。

「：あのね、鳩くん。」

少年が恥ずかしそうに伏し目がちに男を見た。

「：昨日みたいなことにならない様に、これから

は自分でも調節するようにするね：。ボク、どうしても鳩くんがよかったから、最近は自分ではしなくなかったんだ：。だから、我慢できなくて昨夜みたいなことになってしまったんだと思う：。今度から鳩くんは無理させない様に気を付けるようにするから。：それにしても、ボクって夜になると別人みたいになるよね。何だか鳩くんのこと自分の持ち物みたいに思ってしまった。鳩くんが欲しいって思ったら、抑えられなくなってしまったんだ。：何ていうか：凄い押しが強いよね、夜のボクって。」

申し訳なきように懸命に言い訳する人間のリクオは、とても優しく真面目そうな少年だった。その様子を眺めながら、男が首を振った。

「お前が妖の時と人の時とでは、物事の捉え方が違うことぐらい、とっくに知っている。いちいち気にするんじゃない。：それより、ここへお前を呼んだのは説教するためじゃねえよ。勘違いすんな。お前を此処へ呼んだのは、そんな事とは関係ない。全くの別件だ」

「：じゃあ、何？」

口籠りながら、少年が問い返す。

「：とぼけるじゃねえ。わかっているんだろ。」  
「：：：：：：：：：：」

少年が、もじもじと居心地悪そうに指先を動かした。

「：リクオ、分っているなら、さっさと脱げ。」

「：：：：：：：：：」

「：勿論、全部だ。」

男は、表情も変えずに答えた

\*\*\*

男の指示で、身に着けているものを全て取り去り、全裸となって立った少年の前に、座を定めていた筈の男は、やおら胡坐を崩して立ち上がって近づき、その正面に膝を付いた。じっと萌黄色の腫で入念に少年の身体全体の望診を行い、今度は懐に入れて温めていた手を差し伸べると少年の腹に、そっと手を当てた。

「薬湯は、ちゃんと飲んだか。」

「：うん、いつも枕元に置いてある煎じ薬なら飲んだよ。鳩くんも飲んでいる毒消しの薬でしょ。」  
「：ああ。」

男がほっとしたように頷いた。そして少年の顔を見上げる。

「：リクオ、何処か、痺れている所とか、爛れている所とかはないか？」

真剣な声で、男が問う。

「：無いよ。」

溜息交じりの少年の声が小さな部屋で響いた。

「：診たところは、特に問題はなさそうだな。」

少年の胸と腹を診ていた男の手は、その下腹部へも遠慮なく伸びる。そして、その男だけを知っている雄ですら、温かい指先で丁寧に触れつつ観察する。敏感な場所に触れられて、少年が擦ったそのうに肩を竦めた。けれどリクオの身体を気遣う薬師妖の切診に例外はない。

「：ねえ、鳩くん、毎回こういうのは、本当は嫌なんだけど。」

少年の苦情を、男は意に介すことなく、掌で丹念にその肌を全て確かめていく。

「：仕方ねえだろ、オレは毒を持っているんだぜ。特に昨日の晩はオレも体調が悪くて、お前に充分に気を配ってやれなかったからな。」

：そんなことはないどリクオは思う。急な訪問だったのにもかかわらず、いつも以上に執拗な愛撫を施してくれたと思うし、体調の悪い中、ぎりぎりまで理性を失わず、最大限の努力をしてくれたと思う。それは、恐らく薬師としての意地もあったのかも知れないけれど。

「：ところでリクオ、身体は楽になったか？」

男は少年の表情を窺うかのように、ちらりと覗き見ては、さりげなく視線を外した。

「：うん、とっても楽になった。鳩くんの身体：凄く：凄く良かったよ。」

少々はにかみながら、少年は答えた。

「：そうか、ならよかった。」

「：ぜ、鳩くんはどうだった？ボクの身体は：よかった？」

そう問い返されて、男の手が止まる。

「：ああ：よかったに決まっているだろ。あんな

素直で綺麗な身体は、オレには勿体ないくらいだぜ。」

男の率直な答えに、少年は改めて頬を赤く染めたのだった。

昨夜の事を思い起こしてみれば、久しぶりの逢瀬で鳩を求める気持ち昂ぶってしまい、理性など消し飛んでいたと思う。

目の前の鉄紺色の刺青に目を奪われ、無我夢中で唇を押し当て舌を這わせていった。そんな自分を宥めるかのように、男の大きな武骨な掌が妖の自分の広い背中を撫で、肩を滑り、胸を擦って愛撫し、更に、しっかりと抱きしめてくれた。丁寧で深い口付けも与えてもらった。

身体を重ねるようになった最初の頃は、自分の全てを知り尽くされそうな愛撫に不安になり、我を失うまいと懸命に抗ったこともあった。けれど、その度に、鳩にオレの前では、自分を作ったり気を張ったりする必要はねえよ、もっと素直になれ、と言いつめられたものだった。すっかり身体が馴染んだ今では、寧ろ自分の方が積極的になってし

まっている気さえする。

そして、鳩の瘦せた上半身を彩る色鮮やかな刺青の紋様は、いつも自分を翻弄する。瘦せているくせに硬い筋肉の付いた逞しい肩も堪らなかつた。言うまでもなく、鳩の男を象徴する場所も雄々しく魅力的で。でも、本当の鳩は、空を優雅に舞う鳥のように繊細な一面も持っているも理解出来ているつもりだ。最近では、この薬師の妖の身体を、隅々まで知り尽くしている自信さえある。

それにしても、昨夜は久しぶりの逢瀬だった所為もあり我を忘れて鳩を求めてしまった。いつもより手荒だったうえ、一方的だったと思う。なのに鳩は、突然の訪問を病の身にもかかわらず迎え入れ、自分の身勝手な欲望を慰め、宥め、受け入れてくれた。鳥妖の温もりを肌を感じながら、息を乱し、汗で濡れ、極みにたどり着くまでの時間も短かったと思う。夜の荒々しい自分も、昼の大人しい自分も、鳩には必ず受け入れてもらえることが何より嬉しかった。奴良組では、豪胆な夜の姿が求められ、学校では優等生の昼の姿が求めら

れる。けれど、ここでは、鳩の前では、どちらの自分でもいい。どんな自分も受け入れてもらえる。

外で朝の鳥たちの賑やかな囁りが聞こえていた。庭の豊かな樹木の実や花の蜜を求めて、朝早くから薬鳩堂へ小鳥たちが訪れる。母屋の軒下には、巣を作った番がいるようで、餌を強請る雛たちの愛らしい鳴き声も時折聞こえる。

出入りや抗争に先陣を切って望まなければいけない総大将となつてからは、ここでの朝は心安らぐひとときだった。少年は目の前で膝を付いたままで、リクオの身体を大きな掌で検分し続けている男へ視線を落としてみる。

「リクオ、今度は後ろを向いてくれ。」

「うん。」

聞き分けよく、くるりと向きを変えて背を向ける。

「：あのな、リクオ。」

男はリクオの背後で、武骨な掌を移動させながら少年の背中と腰を診ており、表情は全く見えな

った。

そして、男の手が止まる。

「：リクオ。昨日の夜、話したけどよ。」

少し間をおいて意を決したかのように、ぽつりと男が言葉を吐いた。

「：昨日の夜？」

「：オレが言っていた、例の身内の娘との縁談、考えてみる気はねえか。」

「：。。。。。」

男の申し出に、少年は言葉を失った。

：もしかして鳩くんに目元がそっくりだって言っていた親戚の娘のことだろうか。

「噂だといいい娘らしいぜ。」

「：。。。。。」

あまりのことにリクオには、返す言葉もなかった。鳩の気持ちが変わらない。だが鳩は、この手の冗

談を言う男ではなかった。少年は眩暈がするよう  
な気がして目を伏せる。自分でも瞼が微かに震え  
ているのが分かった。

—この男は、なんて酷薄なんだろう。

「：賢くて綺麗だそうだ。評判はいい。」

—この男は、なんて卑怯なんだろう。

「優しい性根だから、お前に一生尽くすぞ。」

この男は、幼馴染で義兄弟でもある奴良組三代  
目の自分と恋仲になり、幾夜も情を交わし、：そ  
して後朝に、禰で名を呼んだその口で平気で他の  
女を勧める。しかも、自身によく似た身内の女を。

「なあ、リクオ：。」

男の声が上擦っている。

それは、決して言葉を返してこない義兄弟のり

クオの本心を明らかに悟っている声だった。背後にいるため、少年には様子を知らないのできかないはずなのに、リクオには、男の背中が、肩が、掌が、小刻みに震えているのが伝わってきていた。

今、この男はどんな表情をしているのだろうか、少年は思った。でも何も気づいていない振りをする。

鳩くんの言葉なんて、全然、聞こえない。

鳩くんのした話の内容なんて、覚えていない。

もしかして、三代目のボクに綺麗で優しいお嫁さんを宛がう策を講じようとしているのかもしれないけど、その手には乗らない。どんな良縁を持ってきても、ボクには相手に会う気もないし、関係ない。勿論、ボクの寝室に送り込んで、無駄だよ。絶対に絶対に抱かない。

だから、鳩くんの短い生涯は、ボクの元で終わるんだ。奴良組三代目総大将として、貸元薬師一派頭領の鳩くんを、一生守ってあげる。その代り、

鳩くんは大空を渡る鳥たちのように自由に羽ばたいて、ボクから去っていくことなど許さない。

男の話に少年が沈黙を守り続けていると、男が背後から、突然、リクオの腕を掴んだ。震えて汗ばんだ手で少年の腕をきつく握る。

「：リクオ。オレは、この薬鳩堂を畳んで、お前の前から消える。：決して迷惑は掛けねえ。：だから、先の事は何も心配する必要はねえんだよ。」

男の舌は縛れ、戦慄き、最後は、ただ言うだけが、精一杯のようだった。

それでも頑なに、気が付かないふりをし、聞こえないふりをし、振り返ることも、返事をすることもしない少年は、そんな自分の事を、縁談の話を持ち出した男以上に、酷薄で卑怯な存在なのかもしれないと強く思ったのだった。

終

こんにちは。「花ふわり」のふみです。リクオと鳩の二人が大好きで、お話を書いてみました。書いた本人は、鳩リクだか、リク鳩だが、分らないで書いています。そんな私の書いたお話を読んでくださった方、ありがとうございます。

今回、「十字屋」須永恭子さまがイベントに参加なさるのに際して声を掛けてくださいまして、思い切った本を作ってみました。恭子さま、お忙しい中にもかかわらず、色々教えていただき、ありがとうございます。

この本は個人的には、ちょっとだけ拘った部分もあったのですが、もし気が付いた方がいたら嬉しいですよ。いや、私の妙な拘りなんか、どうでもいいんですけど。

普段は「花ふわり」というサイトを運営しています。もし、お暇な時間がありましたら、覗いてみてください。

ふみ

ぬらりひよんの孫 ファン小説 鳩×リクオ×鳩  
「雲隠れ」  
(ファン小説につき、原作とは関係ありません)

素材 ©Yoshio Jogan

二〇一一年六月二十六日発行

印刷 サンライズオンデマンドサービス様

花ふわり

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~fuwafuwa/>  
ふみ

(無断転載、無断複写はご遠慮ください)